

飼育員、虎の園長に夜の巡回で屈する

R18

2026
・
9
・
30

目次

第
01
話

第
02
話

第01話

開園の二十分前、蒼は台車を押して東の猛獣舎へ向かっていた。
台車には解けかけた馬肉のケースが積んである。

「蒼、ちょっといい？」

後ろから透が走ってきた。同期の飼育員で、担当は隣のキリン舎だ。

「今夜の夜間巡回、代わってくんない？ 彼女の誕生日でさ」

「また？ 先月もなかった？」

「先月は親戚の法事。今回はマジ。焼き肉おごるから」

蒼は台車を止めて、わざと大きく息を吐いた。

「……いいよ。そのかわり、いい店な」

「助かる！ 恩に着る！」

透は両手を合わせてから、麒麟舎のほうへ駆け戻っていった。

開園のベルが鳴ると、猛獣舎の観覧窓の前には、すぐに親子連れが集まった。

ガラスの向こうでは雌の虎のハナが岩の上で寝そべっている。

蒼は作業帽をかぶり直し、マイクのスイッチを入れた。

「おはようございます。これからハナのごはんの時間です」

子どもたちが窓に張りついた。

小さいころ、蒼もこの窓に鼻をくっつけていた。ここに立つ人になりたくて、飼育員になった。

「ハナは何を食べてるんですか？」

「馬のお肉です。骨ごと、バリバリ食べちゃいますよ」

「こわーい！」

「こわくないよ。ハナは食べるのがとっても上手なだけ」

笑い声が上がった。

そのとき、列の後ろがざわついた。

園長の鉄が人垣を分けて歩いてくる。

虎の獣人で、大人の中にも肩から上が飛び出していた。まくったシャツの袖から、黒いしまの入った腕がのぞいている。太い尾が歩くたびにゆっくり揺れた。

「あ、本物のトラだ！」

「本物の園長だ」

鉄は低い声で返し、子どもの頭に大きな手をのせた。泣きそうだった子が次の瞬間にはきやつきやつと笑っていた。

「おじさんも、生のお肉食べるの？」

「焼く」

また笑いが起きた。

鉄は蒼の真横に立った。いつもなら、デモの間に園長がここまで近づくことはない。

蒼が馬肉を投入口に落とすと、ハナが岩から飛び降りた。

そのとき、鉄が鼻にしわを寄せ、上唇を少しめくった。

虎が知らない匂いを嗅いだときの顔だ。ハナも、新しい寝わらを入れるとこの顔をする。

金色の目が蒼の腰のあたりで止まった。

蒼はマイクを握ったまま、半歩だけ横にずれた。

蒼はカントボーイだ。体はほとんど男だ。ただ、へその下だけが女のつくりをしている。知っているのは実家の家族と、かかりつけ

の医者だけだった。

デモが終わると、案内所から無線が入った。

「南休憩所に迷子です。男の子、青い帽子」

蒼は手袋を外してポケットに突っ込み、南へ走った。

休憩所のベンチで、小さな男の子が膝を抱えて泣いていた。

蒼はしゃがんで、目の高さを合わせた。

「お名前、言えるかな？」

「……ゆいと」

「ゆいとくんか。お母さんは、何色のお洋服着てた？」

「……みどり」

蒼は無線を口に当てた。

「迷子のゆいとかん、南休憩所で保護しています。お母さんは緑の服です」

放送が流れて間もなく、緑のシャツの女性が走ってきた。

母親は男の子を抱きしめ、頭を下げ続けた。

「また来てね。今日は暑いから、帽子とらないでね」

蒼が手を振ると、男の子は母親の肩ごしに小さく手を振り返した。

背中のシャツが汗で肌に張りついていた。

振り向くと、日陰の柱に鉄がもたれていた。

「見てたんですか」

「窓の前でも、ここでも、同じ顔するんだな」

「……仕事ですから」

「今夜、巡回だろ」

「透と代わったんです。なんで知ってるんですか」

鉄は答えなかった。尾の先だけがぱたりと柱をたたいた。

閉園のベルが鳴り、来園者は北門へ流れていった。

二十時、蒼は懷中電灯と鍵束を持って、猛獸舎の裏に入った。

表の観覧窓の裏側は飼育員しか通れない給餌通路になっている。

コンクリートの床に、生肉と獣の匂いが染みついていた。

ハナは寢室で丸くなっていた。鉄格子ごしに、ゆっくりとした寢息が聞こえる。

「おやすみ、ハナ」

鍵を確かめて振り返ると、通路の真ん中に鉄が立っていた。懐中電灯の光を浴びて、金色の目が光った。

「うわっ……園長。驚かさないでください」

「鍵の閉め忘れがないか、見に来た」

「私が今、確認しました」

「そうか」

鉄は動かなかった。通路は狭く、横をすり抜ける隙間はない。

「……ずっと、気になってた」

鉄が近づいた。蒼は下がり、背中に冷たい壁が当たった。

「お前、雌の匂いがする」

喉がひゅつと鳴った。

「何の、ことですか」

鉄は答えずに身をかがめ、蒼の首筋に鼻を寄せた。すうつと長く息を吸い、ざらついた舌で首筋をべろりとなめ上げた。

「ひっ……」

鼻先は鎖骨から腹へ、さらに下りていく。

「やめてください、園長」

「ハナの寢室の前で騒ぐな。起きる」

鉄が膝をついた。作業ズボンの股に、鼻が押しつけられる。

ふーっ、と熱い息が布ごしにかかった。

「っ……っ！」

「ここだな。隠してたのは」

「違います、そこは……っ」

「匂いはうそをつかない。……濡れてきたぞ」

「濡れてませんっ」

鉄は立ち上がり、片手で蒼の両手首をまとめて、頭の上の壁に押

さえつけた。

もう片方の手がズボンのボタンを外す。ファスナーが下がる音が、通路に響いた。

「園長っ、やめ……」

大きな手が下着の中に入ってきた。指は太いが爪は引っ込めてある。

男ならちんぽがあるはずの場所を、指の腹がなぞった。割れ目はもうぬるぬるに濡れていた。

「……ほらな」

「ちが……っ、これは、汗……」

「汗がこんなに糸引くか」

指が割れ目を上下に往復する。くちゅ、くちゅ、くちゅ。自分の体から出る音だと、蒼は認めたくなかった。

指先が上の小さな粒を探り当てた。

「ひっ♡」

「ここか」

クリを、ざらついた指の腹でこねられる。くりくりくりっ、と押しつぶすように。

「やっ、あ、だめ、そこ、だめですっ♡」

「声がでかい。ハナが起きるぞ」

「じゃあ、やめ……っ、あっ、あっ♡」

太い指がまんこの入り口に浅く沈んだ。ぬぷつ、と濡れた音がした。

中を、くいと曲げた指でこすられる。同時に、親指がクリを押しつぶす。

ぐちゅぐちゅぐちゅつ、くちゅくちゅくちゅつ。

膝ががくがく震え、蒼は壁に背中を預けるしかなかった。

「やだ、やだ、なんか来るっ、来ちゃうっ♡」

「来い」

「あつ、あ、あ〜〜〜〜っ♡♡」

腰がびくびく跳ねた。鉄の指を、まんこがぎゅうつと締めつける。

ぷしゅつ、と潮が噴いて、下着の中にあふれた。

鉄は指を抜き、濡れた指を自分の口に入れた。ざらりとした舌が指の根元から先までなめ上げる。

「……甘いな」

手首を放されると、蒼は壁をずるずると滑り落ち、そのまま動けなかった。

「このこと、誰かに……」

「言わねえよ。お前が黙ってるならな」

鉄は蒼のズボンのファスナーを、自分の手で上げた。

「明日の夜勤表、見てみる」

それだけ言って、鉄は通路の奥の暗がりへ歩いていった。

巡回を終えて事務所に戻ると、ホワイトボードの夜勤表が書き換わっていた。

透の名前はすべて消されていた。

明日の欄にも、その次の欄にも、太いマーカーで同じ字が並んでいる。

「巡回　蒼（園長同行）」

蒼はまだ湿ったままの下着の中で、太ももをきつく閉じた。

第02話

翌朝、蒼はキリン舎の裏で透をつかまえた。

「夜勤表、見た？」

「見た見た。園長が書き換えたんだろ。俺の名前、全部消えてたわ」

透は干し草の束を下ろし、首のタオルで顔をふいた。

「今夜、戻してくれない？ やっぱり俺、夜はちよっと」

「無理だつて。園長の字だぞ、あれ。勝手に消したら俺が怒られる」

「透から言つてよ。やっぱり自分がやりますって」

「言えるかよ、あの顔に」

透は笑つたが蒼と目を合わせなかつた。

「……昨日、なんかあつた？」

「別に。なんで？」

「いや。首、赤いから」

蒼は作業着の襟を立てた。鉄のざらついた舌にこすられたところだつた。

「虫。ハナの寝室、蚊が多いんだよ」

「ふーん」

透はそれ以上聞かず、キリンのほうへ歩いていった。

昼休み、蒼は更衣室でスマホを握っていた。

画面には市の動物園課の電話番号が出ている。

園長に体を触られた。そう言えば、誰かが来て話を聞くだろう。

どこを、どんなふうに、と聞かれるだろう。

へその下のことを、知らない大人たちに説明する。うわさは園に広がる。子どもたちの前に立つ自分を見て、親たちがひそひそ話す。

親指が発信ボタンの上で止まった。

蒼は画面を消し、ロッカーに額を押しつけた。

二十時。給餌通路の手前にある調理室で、鉄は待っていた。

ステンレスの作業台に腰をかけ、腕を組んでいる。冷蔵庫のモーターが低くうなっていた。

蒼は入り口で足を止めた。

「条件があります」

「言ってみろ」

「入れないでください。それと、ハナの見える場所ではしないこと。それから……デモは、今までどおり私がやります」

鉄は少し黙ってから、口の端を上げた。

「入れない。ここならハナは見えない。デモは好きにしろ」

「……本当ですか」

「そのかわり、脱げ」

蒼は唇をかんだ。作業ズボンのボタンに手をかける。指が震えて、なかなか外れなかった。

ズボンと下着が足首に落ちた。空調の風がむき出しの太ももをなでた。

「台に座れ。脚、開け」

言われたとおりにすると、ステンレスの冷たさが尻にしみた。

鉄が蒼の前に膝をついた。昨夜の通路と同じように、園長が蒼の股のあいだにしゃがみこんでいる。

大きな両手が蒼の膝の内側をつかんで左右に割った。

「……っ、見ないでください」

「きれいなまんこだな。毛も薄い」

「言わないで……っ」

鉄が顔を近づけた。熱い息が濡れはじめた割れ目にかかる。

「入れない、とは言った。なめない、とは言っていない」

べろり、と下から上へなめ上げられた。

「ひあっ♡」

人間の舌とは違った。表面が細かくざらついていて、やすりのように粘膜をこする。

ハナが骨から肉をこそげ落とす舌だ。毎日、蒼が見ている舌だ。

「あっ、あっ、ざらざら、して……っ♡」

「痛いかな」

「いたく、ない、けど……っ、あ、ああっ♡」

べろっ、べろっ、べろおっ。

平たくした舌で、まんこ全体をゆっくりなめ上げられる。割れ目の奥にたまったまん汁まで、ざらついた舌がかき出していく。

じゅるっ、じゅるるっ、じゅぞぞっ。

鉄が音を立てて吸った。

「やだ、音、やだあ……っ♡」

「お前が出してる音だ」

舌先がクリをとらえた。

ざり、ざり、ざりっ。

「あゝ♡　そこ、そこはっ、だめ、だめですっ♡」

小さな粒を、ざらついた舌の表面で繰り返しこすり上げられる。
逃げようとした腰を、鉄の手が台に押さえつけた。

ちろちろちろちろっ、ざりざりざりっ。

「ひっ、い、いっ、ひいっ♡　やだ、こすれ、こすれるっ♡」

「もっと脚開け。閉じるな」

「むり、むりっ♡」

蒼は思わず、鉄の頭をつかんだ。丸い耳が手のひらの中でぴくりと動いた。押しのけるつもりだったのに、指が耳の付け根の毛をつかんで、自分のほうへ引き寄せていた。

鉄が喉の奥で低く笑った。ごろごろと、猫が喉を鳴らすような振動が、まんこに直接伝わってきた。

「んゝうっ♡♡」

舌がまんこの入り口に押し当てられ、ぬるりと中へ入ってきた。

（入れないって、言ったのに……っ♡）

浅いところを、ざらざらの舌がぐるりとなぞった。そのまま鼻先がクリに押しつけられる。

ぬちゅぬちゅぬちゅっ、じゅぷっ、じゅぷじゅぷっ。

「あっ、あっ、あっ、きちやう、またきちやうっ♡」

「昨日より早いな」

「いわないでっ、あ、あ、あ〜〜〜〜っ♡♡」

背中が反り、かかどが台の縁を蹴った。

ぷしゃっ、ぷしゃあっ。

潮が鉄の顔にかかった。鉄は顔をそむけもせず、まんこからあふれたまん汁を舌ですくい取った。

「……っは、はぁ、はぁ……」

蒼は台の上で脚を開いたまま、しばらく息しかできなかった。

鉄が立ち上がり、手の甲で口元をぬぐった。

「条件は守った。入れてない」

「舌、入れた……」

「舌は数に入らねえ」

鉄はベルトに手をかけた。

スラックスの前を開けると、赤黒いちんぽが跳ね出る。蒼の手首より太い。

そのさおの先のほうに、細かいトゲがびっしり並んでいた。

「……な、に、それ」

言ってから、蒼は思い出した。飼育員の研修で習った。雄の虎のちんぽにはトゲがある。

「虎のちんぽだ。見たことねえか」

鉄は硬くなったそれを、蒼の濡れた割れ目にぴたりと押し当てた。トゲがクリの横をざりつとこすった。

「ひっ♡」

「今夜は入れない。約束したからな」

鉄は腰を引き、ちんぽをしまった。

「明日の夜は、条件なしだ」

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 飼育員、虎の園長に夜の巡回で屈する

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・9・30

レーティング R18